

聖書：ローマ7：7～13

説教題：律法と罪

日時：2015年10月11日

パウロは今、「聖化」について語っていますが、その基礎となるメッセージは、クリスチャンは今や信じる以前とは異なる状態に置かれているということです。キリストを信じて義と認められただけでなく、キリストと結ばれて決定的な聖めも受けている。まず罪との関係で言えば「罪に対して死んだ」とか「罪から解放されている」とか「罪の支配下にはない」と言われました。それと合わせて律法との関係も述べられて来ました。6章14節に「あなたがたは律法の下にはない」と言われました。また7章6節では「律法に対して死んだ」とか「律法から解放されている」と言われました。まるで罪について言われたことが、そのまま律法についても言われているようです。とすると今日の7節の問いが出て来るのは自然でしょう。それではどういうことになるのか。律法は罪なのか、律法は悪なのかと。これは重大な問いです。なぜなら律法は神がイスラエルに与えた特別な賜物だからです。ユダヤ人の宝だからです。その律法の下にあることをまるで地獄の下にあるかのように語って良いものだろうか。そう問わずにいられないわけです。この問いに対してパウロは結論的に12節で、律法は良いものだと言います。それは当然のことです。では何が問題なのか。何が悪いのか。そのことを掘り下げているのが今日の御言葉です。

7節：「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。」この問いに対してパウロは「絶対にそんなことはありません」と断言します。しかし律法と罪には何の関係もないわけではありません。パウロは続いて律法と罪にはある関連があるということを述べて行きます。まず彼が述べていること、それは「律法によらないでは、私は罪を知ることがなかった」ということです。「むさぼってはならない」という律法がなければ、私はむさぼりを知らなかったと。これはどういう意味でしょうか。律法は神の御前で何が正しく、何が間違っているかをはっきり示す物差しです。従ってこの律法があることによって、自分はどんな罪を犯しているかが分かった。これによって自分がむさぼりの罪を犯していることを知った。そのような意味に読めます。しかしここではもっと深い意味で言われていることが、続く8節を見ると分かります。

8 節：「しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。」ここに戒めを通してむさぼりが引き起こされたと言われています。戒めがあることによって罪は刺激されて一層の活動へと駆り立てられた。8 節後半に「律法がなければ、罪は死んだものです。」とあります。つまり律法がそこになければ、罪はまるで死んでいたかのようにおとなしくしていた、不活発であった。ところが律法に接した時、罪はまるで眠りから覚めた巨人のように、むっくと起き上がって活動し始めた。すなわちむさぼるなという戒めとは反対に、むさぼる行動を取るようになり始めた！と。なぜでしょうか。それは人間の心には神への反逆心が巣食っているからです。神には従いたくない。自分の思い通りにしたい。もし自分に何かを命じるならそれに反抗してやる。そのため戒めを聞くと、この反抗心を持つ罪がムクムクと頭をもたげて来て、その実体を現わし始めるのです。

たとえば一例としてエデンの園における禁令のことを考えて見て下さい。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べて良い。しかし園の中央にある善悪の知識の木からは取って食べてはならない。」今日の多くの人々は、この戒めを聞くと口をとがらせ、文句を言い、不満やいらだちの姿勢を示します。なぜ神はこんな制限を設けたのか。なぜ神は私たちに何かを禁じるのか。どうして全部食べて良いとしてくれなかったのか。神が悪いのではないか。そう感じるでしょうか。とするなら、今日の箇所はこう言っているのです。「ほら、戒めがあると、あなたの罪の性質が現われ始めるでしょう。」私たちはたとえ相手が神であっても、私に何かを命じる存在を見ると反発したくなるのです。そういう私たちの中にある罪は、戒めがない時は静かで死んでいるようですが、戒めがあると突然、反抗という形で自分を現わし始めるのです。

9 節でパウロはこう言います。「私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。」彼はここで、自分の人生には「律法なし」の時代と「戒めが来た」時代とがあったという言い方をしています。しかしパウロはユダヤ人として小さい時から律法の教育の下に育って来た人ですから、文字通り「律法なし」の時代はありません。ですからこれは律法はあったけれど、真の意味を持ってパウロに迫ってはいなかった時のことを言っているのでしょう。

そして反対に「戒めが来た時」とは、律法が真の意味を持って彼に迫って来た時のことを言っているのでしょうか。律法なしの時、パウロは普通に生きていました。しかし律法が迫って来た時、何が起こったのでしょうか。パウロは「罪が生き、私は死んだ」と言っています。これは不思議なことです。律法はどんなに役割を果たすと私たちは考えるのでしょうか。律法は私たちの罪を抑制し、私たちを矯正し、義の道へ導いてくれると私たちは考えると思います。ところが実際は逆のことが起こったのです。すなわち戒めが来た時、罪が突然、息を吹き返した。かえって罪が勢いづき、とてつもない力を現わし始めた。あるものに対してある抵抗を加えると、その持つ力が引き出され、発揮されるというのは、色々な状況でも見られることです。たとえば車のエンジンもそうです。ただアイドリングしたり、平地をゆっくり走っている分には、その車がどれだけ力のあるエンジンを持っているかは良く分かりません。その力を引き出すためにはどうしたら良いのでしょうか。それは峠道を走ってみれば良い。山岳道路をドライブしてみれば良い。それによってエンジンの馬力を実感できるのです。それによってそれまでは良く分からなかった「正体」が見えてくるのです。同じように私たちの罪も何もない状態では静かでまるで死んでいるようできえある。しかし律法が来ると、それに抵抗しようとして、その隠れた力を現わし始めるのです。律法を契機として、それまで実在していたけれども良く見えなかった罪が活動し始める。パウロはこういう意味で律法がなければ、罪を知らなかったと言っているのです。戒めが来た時に、それに喜んで従おうとしない自分の内で働く力に直面し、自分がいかにそれまでは見えなかったとてつもない力のとりこになっている人間であるかが分かり始めた。

もう少し良くイメージできるために、イエス様の時代のパリサイ人を考えることもできます。彼らは律法に熱心で、道徳的で、模範的な人たちとして一般民衆から尊敬され、人気がありました。しかしイエス様が来た時、どうだったのでしょうか。彼らの内に隠されていた悪い心、妬み、党派心といったものが一気に外に吹き出して来ました。もしイエス様が来なければ、彼らはいつまでも良い人たちのように見えました。しかしイエス様が来た時、彼らが実はどんな人たちであったかがさらけ出されたのです。彼らの苦々しさを見よ。彼らの敵意を見よ。あの巧妙さ、悪賢さ、陰謀を企み、誘導尋問をしかけ、やみの中で主を十字架につけようと画策した姿を！一見まじめで正しい人に見えた彼らの中に、何ととてつもない罪が隠されていたことか。もちろん私たちは人のことだけ言えません。同じように私たちも、自分

の罪は今、見えないようになっているだけで、本当はある状況になれば引き出されるところとつもない力が、自分の内に眠っているということがあるのではないのでしょうか。私たちはその自分の罪を知っているのでしょうか。

パウロがこうして分かったことが 10～11 節に記されています。それは戒めが私を死に導くということです。本来、律法は義の道へと人の歩みを向けさせ、いのちを促進させるものです。ところがこの戒めによって自分は一層の罪へと駆り立てられ、死の道へと追い立てられてしまう。11 節に、罪が「私を欺く」とあります。パウロは律法にしがみついて行けばやがていのちにたどり着けると思って一生懸命にこれを頼りに生きていました。ところがその律法に頼れば頼るほど、益々予想もしなかった反対の実が結ばれて行く。パウロはそういう意味で欺かれ、死の道へと導かれるばかりであった。このことが「分かった」という時の彼の衝撃を私たちは理解できるのでしょうか。自分にとって救いの道と考えて来た道が、実は滅びへと導く道だった。自分が信じて来た道は、自分にとって何の助けにもならないばかりか、一層死へと駆り立てる道だった。こういう意味でパウロは罪の力、罪の実体を知ったのです。

さてこれまで述べて来たことの結論が 12～13 節にあります。まず一つ目は 12 節にある通り、「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです」ということです。律法は聖なる神のご性質を反映するものです。神の完全性の写しです。何が正しく、何が悪であるかをはっきり示し、どこに幸福があるかを指し示してくれるものです。神は慈しみの心から、これを人間に与えてくださいました。

ではこの良いものが、私に死をもたらしたのかとパウロは 13 節で問います。律法は良いものなのに、その良いものが悪い働きをするのかと。これに対してもパウロは「絶対にそんなことはありません」と言い切ります。では問題はどこにあるのか。悪いのは何なのか。パウロが言っていることは、問題にされるべきは律法ではないということです。真の問題は私たちの罪なのだ！ということです。前回、私たちのかつての状態が律法との結婚関係にたとえられました。そして律法の下では救いが無いということを見ました。そのように聞くと律法が悪いように思えたかもしれませんが。夫の側に問題があるのだと。しかしそうではないのです。本当の問題は

私たちの側にあるのです。目を向けなければならないのは私の内にある罪なのです。

この罪について 13 節後半には 2 つのことが述べられています。一つは罪は、良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされたということです。「罪として明らかにされ」という部分を新共同訳聖書は「罪がその正体を現わす」と訳しています。つまりここに罪の正体が現れているということです。もし悪いものを用いて死をもたらすなら、まだ分かります。ところが罪は良いものを用いて死をもたらします。律法は神を映し出す聖なるものなのに、その非常に良い賜物を悪のために用い、私を死へと引っ張っていく。ここに罪の邪悪さ、その恐ろしい正体がさらけ出されているのです。

もう一つは戒めによって「極度に罪深いもの」となったということです。強調されているのは、この罪のひどさです。新共同訳聖書は「限りなく邪悪なもの」と訳しています。私たちに巢食っているのは、このような罪なのです。極度の邪悪さに自分自身を現わす罪なのです。そんな私たちにとって、いくら正しく聖い律法があっても何の助けにもなりません。それを逆に用いて益々悪い結果をもたらすだけだからです。こういう状態に自分があることを知るなら、私たちから出て来る叫びは何でしょうか。それはこの後見る 24 節の言葉ではないでしょうか。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」 救いようのない自分。良いものの下にありながら益々悪い方向へ突っ走って行くばかり。誰がこの死のからだから私を救い出してくれるのか。しかし私たちにとっての福音は、絶望の叫びで聖書は終わっていないことです。その後 25 節の言葉が続きます。そして 8 章に入って 2 節 3 節にこうあります。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。」 この抜け出せないと思われたがんじがらめの状態からの解放を、神はキリスト・イエスにあって備えてくださったのです！

私たちが今日の御言葉から学ぶこと、それは私たちの内には眠っている罪があるのではないかということです。普段はそんなものはないように思います。罪は私の内でそんなに活動していないようにも思います。それは死んだ状態のように思います。しかし何かの時にそれは現れて来るのです。ですから私たちの周りでも毎日恐

るべき事件が起こっています。その人たちも普段、その罪は眠っていた状態だったでしょう。その人たちはいい人たちのように見えたでしょう。しかし何かをきっかけとして、内に隠し持っていたものが外に出て来る。そして限りなく邪悪なものが内に宿っていたことが暴露される。実は私たち一人一人がそういうものを抱えている者たちなのではないでしょうか。いつ極度の罪深さを現わすか分からない爆弾を抱えているような者たちではないでしょうか。

そしてこれと合わせて思うことは、こういう私たちは律法の下では救われないということです。正しい教えがあるだけではダメなのです。むしろその下では一層の悪へと走って行ってしまふ。そこに私たちの救いはないのです。私たちにはそこから救い出してくださる方が必要です。神はその道をキリストにあつて開いてくださいました。キリストに信頼する者を神はこの束縛状態から救い出してくださいます。キリストと結び合わせて、新しい御霊の力によって歩む者としてくださる。そして死に至る道ではなくいのちの道へ、神のために実を結ぶ歩みへと導いてくださるのです。